月刊
えくてびあん
立川と語ろう　立川に生きよう
7
<EKUTEBIAN VOL.16 JULY 1998 EKUTEBIAN>

たちかわの石仏たち⑥

錦六会会館の『延命地蔵』

錦六会会館内、日本画の描かれた美しい襖を開けると、そこには延命地蔵（別名子育て地蔵）がお祀りされています。昭和30年に茅葺きのお堂から立て替えられました。

「芝中（現・錦町6丁目）のお年寄りは長生きだ」といわれるのは、このお地蔵さまのお陰です。風邪やはしかの時にはお袈裟を借り出し、病人の襟元に縫い込んで早く治る事をお祈りし、治ると新しいお袈裟を二本お返ししました。

昔から念仏講があり、2月1日の天道念仏と毎月4のつく日には、現在もお念仏をします。皆で持ち寄ったお供えをお地蔵さまと一緒に頂きながら楽しくおしゃべりしたりと、芝中の女性たちの同窓会のような場となっています。

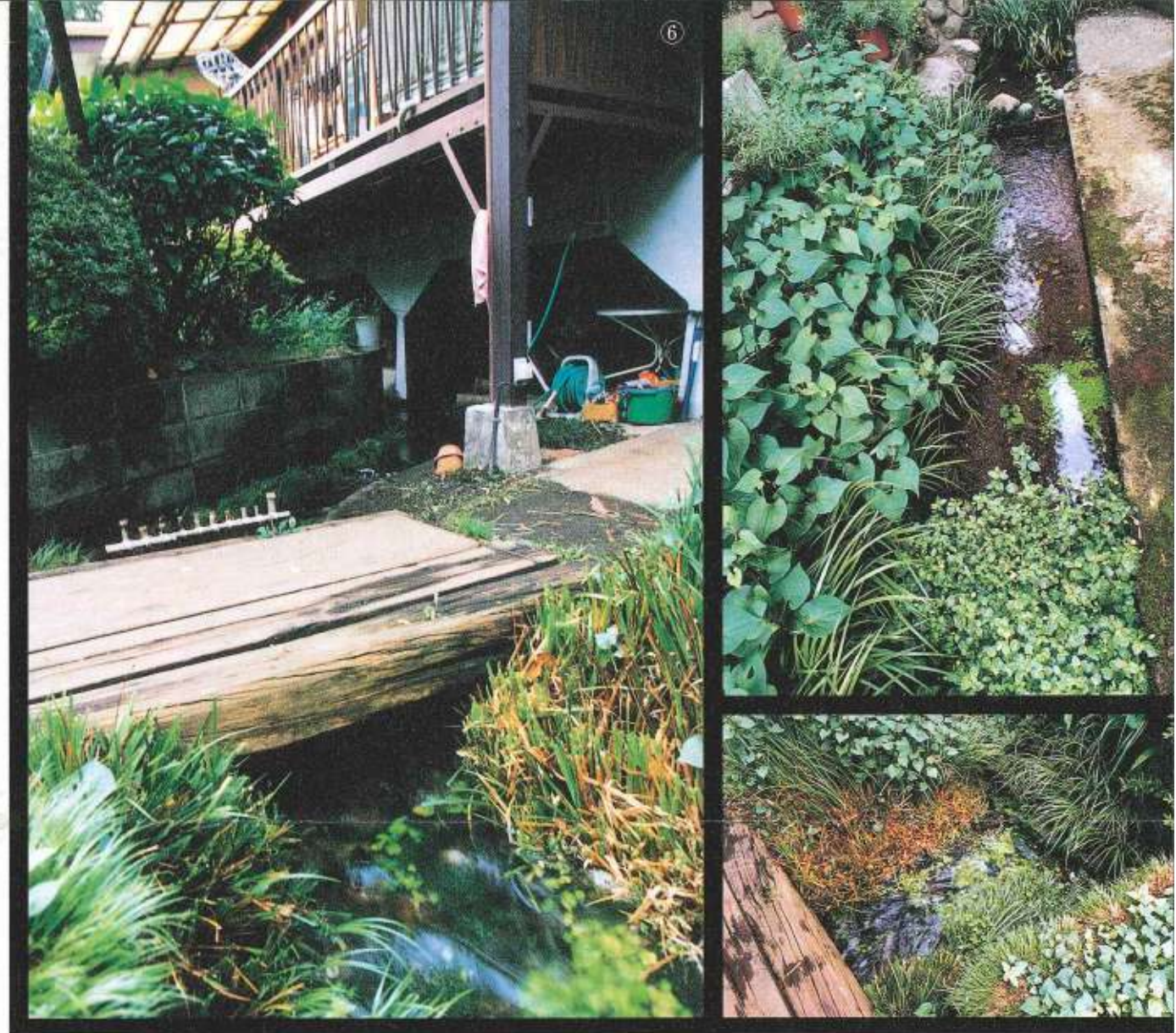
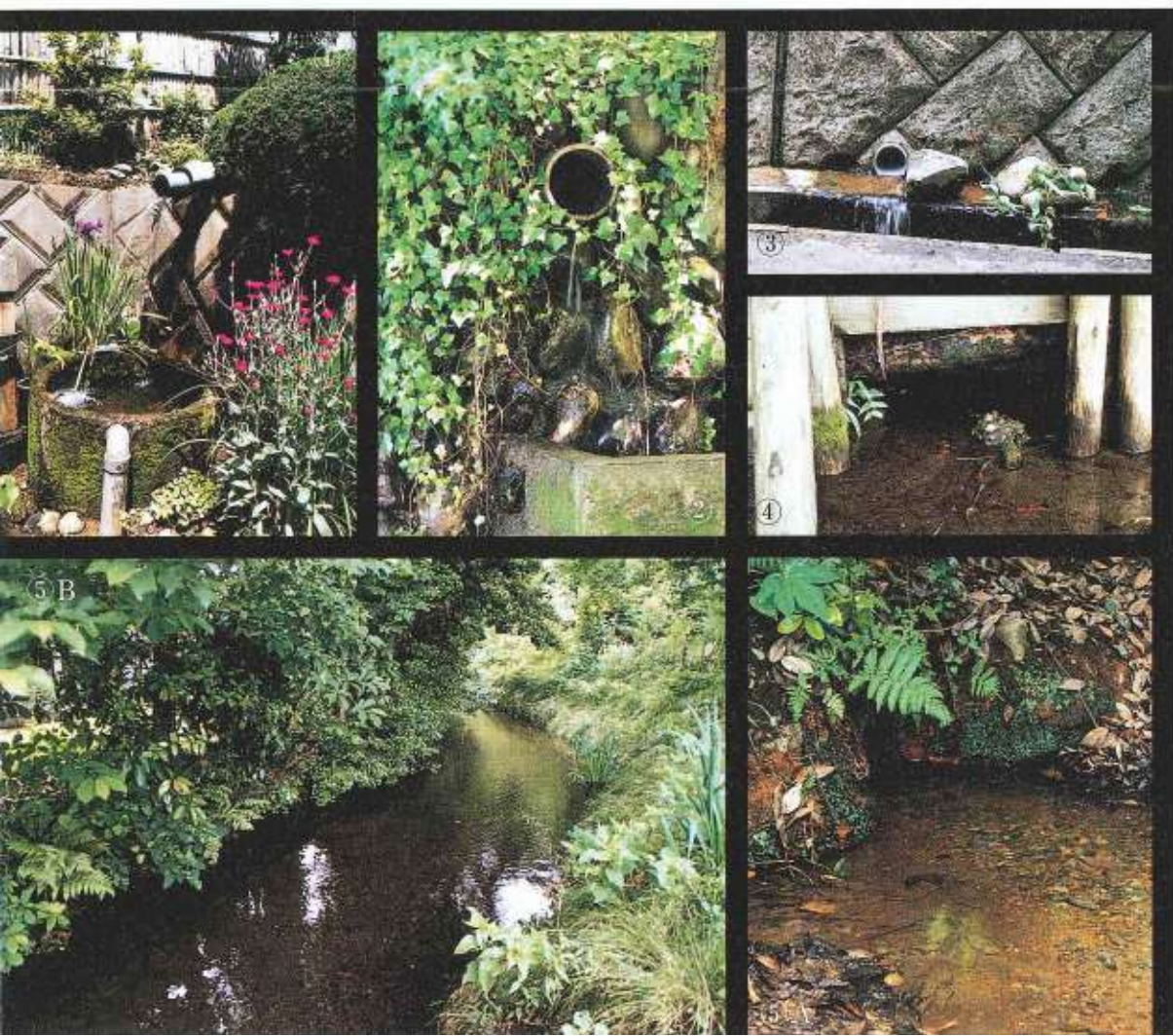
立川民俗の会　高橋千鶴子さん・談

●所在地：錦町6-18-11　錦六会会館内
●建立：延享3年

●えくてびあんレポート

水の湧く家

平成立川せせらぎ考 ②

富士見町から羽衣町へ、立川を東西に横切る青柳段丘に沿って、
わが街の「湧水」は現在十数ヶ所で確認できるという。
その中には、なんと家の“縁の下”から水が湧いている所がある。
セラピー効果もあるといわれるせせらぎの音。その恩恵を
毎日享受しているのは、菅谷健二さん（羽衣町３丁目）のお宅。
湧き出る水が小川となり、菅谷家はそれを跨ぐように建てられている。
「時々、コーヒーを沸かしたりするんですよ」と菅谷さん。
一同、羨望のまなざしとなったのは言うまでもない。
６月８日、立川市消費者連絡会の皆さんと歩いた「湧水ツアー」でのひとこまである。

(1) 富士見町３丁目・
井上さん宅の裏庭から。
(2) 農業試験場の北側。
(3) 根川沿いの切り通しから
湧き出る。
(4) 菖蒲園の北側。
(5) A　矢川に注ぎ込む、
その源。
(5) B　矢川の静かなせせらぎ。
(6) 羽衣町３丁目、菅谷さん宅
の軒下を流れる湧水。
(7) 自然観察友の会・鈴木功
さんの指導で湧水を歩く。
(8) 立川の湧水、水質はどこも
「きれい」だった。

シリーズ この人と1時間⑫

私には何ができるだろうって いつも考えているんですよ。

伏見 裕子さん

ギャラリー『新紀元』オーナー

生まれ育った街への愛着は誰もが持つものだが、伏見裕子さん（曙町2丁目）ほどその想いをダイレクトに、際立った発想を持って形にしている人は他に見当たらない。

各界で活躍する立川高校の同窓生で結成された『紫芳会クラブ』。その交流の拠点として発足、北口にパリの芳香を漂わせたカフェ『時代舎』。今や立川のクラシック音楽シーンに不可欠となったホール『カンマーザール』。さらに今年5月には『時代舎』を発展させたギャラリー『新紀元』をオープンした。

現在伏見さんは、この夏市内各所で行われる『たちかわの夏・音楽祭』のスタッフとしても奔走中。薬局の経営、薬剤師という本業の傍らで展開されるこれらの活動、その発想とエネルギーの原点を語っていただいた。

立井　伏見さんとはいつか必ずお話したいと思っていたので、今日は嬉しいですよ。これまでずっと避けられてましたから（笑）。

伏見　そんなことない、ない（笑）。私ね、これを話したいっていうものがないと話せないんですよ。

立井　去年の暮れに『時代舎』を閉店されて、ちょっと寂しくなるなあと思ってたら、今度はその場所に新しくギャラリーを開かれた。ああ、伏見さんだなあって、安心しましたよ。

伏見　お祝いのお花、ありがとうございました。

立井　僕はいつも不思議に思うんですが、伏見さんは薬局をやってらして、薬剤師なんてそれだけでも大変な仕事でしょう。なのに、他にもいろいろされていて。『紫芳会クラブ』に『時代舎』、『カンマーザール』、そして今度はこの『新紀元』でしょう。

伏見　やっぱり、根っから立川に愛着があるんでしょうね。

立井　でもわが街に愛着があるという人間は、それこそたくさんいるでしょう。その中で伏見さんのような発想で街と向かい合っている人は、あまりいないんじゃないかと思うんです。

伏見　たとえば新聞を読んでいて、何か面白い事柄が載っていたとしますでしょう。そうすると私、ひらめくことがあるんですよ。「あ、ここ（立川）で何かできないかな」とか「これができたら面白いだろうな」って、すぐ考えちゃうんです。クセなんですよ（笑）。

立井　最初に『紫芳会クラブ』という会を発足されましたが、単に立川高校（以下立高）の同窓会というのではなく「クラブ」とされた。これはやっぱり、立高出身というプライドからでしょうか。

伏見　いや、それだけではないですよ。立高は二〇〇一年に創立百年を迎えるんですが『紫芳会クラブ』というのは、二十年近く前、八十周年が終った頃に「同窓会って何だろう」って考えたことから始まったんですね。一生懸命寄付を集めて母校に何かを残すとか、誰某がいくらお金を出したとか、そういうことが同窓生の役割なのだろうか。それだけじゃないんではないか。で、私がまず考えついたのは、街にとって学校というのは「文化財産」であると。

立井　クセが出ちゃった（笑）。

伏見　そう、すぐその線で考えちゃう（笑）。で、結局同窓会の本質は「名簿」にあるんじゃないかな、と思ったんですよ。

立井　名簿、ですか？

伏見　当時でおよそ一万二千名の卒業生がいたんですが、同窓生名簿というのは、ある意味で一万二千名分の人生を語っていることになりますでしょう。これはもしかしたら、立川にとってとても大きい人的な文化財産になっていくんじゃないかって考えたわけ。

立井　それを立川のために生かさない手はないと。

伏見　立高を出た後に日本全国、それこそ世界中にまで羽ばたいて活躍している人たちがいるわけね。そこで活躍して得たエッセンスを集めて記録したり、情報を交換しあったりするところ。それが『紫芳会クラブ』の発想なんです。

立井　なるほど。それで、その人たちが集う場所、ポイントとしての機能を持ったのが『時代舎』であったと。

伏見　そうです、そうです。

立井　どのぐらい続いたんですか、『時代舎』は。

伏見　えーと、丸十五年です。

立井　伏見さんの場合、まず薬局の経営というのがあるでしょう。こちらのビルも伏見さんがやってらっしゃるわけですよね。

伏見　主人（辰三氏・カクニ商会代表取締役社長）が代表ですけれども。

立井　そうすると経営者という側面から考えた時に、利益の追求を考えなくちゃいけない。発想はともかくとして、実際にそれを運営していくということに躊躇はなかったんですか。

伏見　もちろんそれはありました。主人がいなかったらとっくに会社は潰れてます。でもね、そもそもこのビルは第一次石油ショックの真っ只中の頃に非常に苦労して建てたんですね。もう本当に借金だらけで。

立井　ええ、ええ。

伏見　で、こんなに苦しい思いをして建てたんだから、なんとか働いて借金返済のメドが立ったら、九つのフロアのうちどこか一つはピカッと光る何かをやりたい、と主人にお願いしてたんですよ。そこに『時代舎』がピタッとはまったんです。最初の何年かは、もう気負いまくってましたよ（笑）。

立井　でも『時代舎』をやってらして、何というか、海に石を投げるような感覚にはなりませんでしたか。事を起こしてもリアクションがない、というか。

伏見　正直言って、なりましたね（笑）。五年早かったって。でも、そもそも「これが文化だ」って言い切れるものなんて何も無いでしょう。それぞれの価値観や考えがあって、定義のしようがない。

立井　まあ、そうですね。そういう意味では僕も、のっけから「文化論」をぶつ人は、ちょっとマユツバだなって感じがする。論は後からついてくるものですからね。

伏見　立川に文化振興財団ができた当時、最初の評議委員をやらないかって話がきたんです。その時にね、砂川昌平さん（故人）に言われたの。「文化、文化って、文化の名のつく鍋もありゃ、包丁もあるわな」（笑）。

立井　ああ、砂川さん（笑）。さすが、言い得て妙ですねえ。

伏見　これから文化に携わろうって時にね（笑）。でも、その後に「いいか、そういうことに関わるんなら、本気でやれ」と。「文化論なんて考えるな、立川の事だけ考えろ」って、言われて。

立井　えくてびあんを初めた頃にね、砂川さんから「立川には『時代舎』ってのがあるんだよ」ってよく聞かされましたよ。

伏見　初めのうちこそ気負いもあって、いろいろ試行錯誤したんですが、『時代舎』は最終的に「音楽」という方向性におちついたんです。クラシックというより、シャンソンやタンゴといったポピュラー音楽の方で。

立井　そういえば伏見さんも女性コーラスをされてましたよね。伏見さんにとって音楽というのは、やはり特別なものなんですか。

伏見　もう子供の頃から歌は大好きなんです。高校生で合唱、大学に入ってからはアルバイトで、基地の中にある教会の聖歌隊に入ってたんですね。そこで歌っていた教会音楽、宗教曲の素晴らしさが忘れられなくて、それでまた、市のコーラスの活動に飛び込んじゃったんです。その頃は『時代舎』も起ちあげたばかりだったから、もう大忙しで、本当だったらコーラスどころじゃない。ところが、郡司博さん（指揮者）が「ドヴォルザークのレクイエムを演る」って言うんで、どうしても我慢できなくて（笑）。

立井　郡司さんは十年ぐらい前に取材したことがあるんです。練習の模様も見せてもらったんですが、ドイツ語の歌詞を勉強していない人に「出ていけ」なんて言ったりして、とても厳しくて驚きました。市民の活動といったレベルを超えて、正に「鍛える」という感じで。

伏見　それだけの説得力がありますから、郡司さんには。

立井　指導者としてのカリスマ性もありますし。ただ、その時に合唱団の一員で歌っている伏見さんを見て思ったんですよ。この人は他の人に歌わせたり、場を提供したりする役割の人だと思ってたのに、よくこの厳しい鍛練の場に、一合唱団員として飛び込んでいけるなあって。

伏見　私はその辺はとっても素直ですよ（笑）。歌いたいと思って入って、その欲求を満たしてくれる指揮者に出会えたわけだから。もう全然、素直にできますよ。

立井　そのようですねえ。すると、その後の『カンマーザール』の発足というのは、郡司さんという指揮者と伏見さんが、いわば「組んだ」形で出来上がったわけですか。

伏見　そうなんです。その後バッハの楽曲を演ることになったんですが、練習場所の問題が出て来たんですね。それまでは公民館やら教会やらをその都度借りてたんですが、バッハとなるとそうもしていられない。メンバーからの声も大きくなってきて、どこか落ち着いて練習できる場所はないだろうか、という話になったんです。たまたまその時、現在のあの場所が空いていて。コンクリート打ちっ放しの状態だったんですけどね。

立井　それを音楽ホールとして改築したわけですか。

伏見　偶然、コーラスのメンバーに若い建築士がいて、ほとんどボランティアで設計をしてくれたんです。

立井　でも防音もしっかりされていて立派なホールですよね。

伏見　郡司さんも「ここまでのものが出来たんだから、ここを立川の音楽の、ひとつの発信拠点にしよう」と言ってくださってね。それで『時代舎』や『紫芳会クラブ』で培った企画や、コンサートなどをやるようになったんです。

立井　そうだったんですか。いやあ、こうしてひと通りお話を伺っていると、伏見さんは生まれつきのボランティア体質なんでしょうねえ。

伏見　うーん（笑）。立川という街の中で「私には何ができるだろう」ってすぐ考えちゃうんですよ。

立井　たとえば鎌倉とか倉敷といった街の住人だったら、自分の街に対する誇りは当然あると思うんですね。ただそれは、その街の歴史に依っていて、いわば最初から「在る」ものですよね。伏見さんの場合は、在るものに頼るのではなくて、そこに何を「加える」かという面白さだと思うんです。

伏見　私も、今の立川が充分な街だとは決して思ってないんです。ただ、六十という年齢を過ぎてみて、無性に好きな街になってるってことは確かなんですね。

立井　これからまた、どんな面白いものを加えられるか。プラス・アルファ指向で行きたいですね。

工房から

つまるところ、大切なのはある種の「叫び」なのではないだろうか。いまの状態に安息することなく、より良いところを目指そうと挑戦してゆくこと。叫ぶことを止めてしまっては、新しい境地は開けない◆伏見裕子さんもきっと、叫んでいたのだろう。本業を全うしつつ行われる数々の事業や活動。生まれ育った立川という街に対し、常に「自分に何ができるだろう」と考えてしまうというその心底には、ボランティア体質というだけではすまされない、街のあるべき姿を模索する強い志があったに違いない◆しかし伏見さんの他に類を見ないところは、その「叫び方」である。いきなり発想の段階から飛び抜けている。『時代舎』然り、『カンマーザール』然り。文化論に凝り固まった頭デッカチでは、こんな発想は生まれなかっただろう。「海に石を投げるような感覚」に陥りながらもそれを継続されているのは、やはり叫び方の違いだろうか。叫びは時として、耳障りになる。音楽を愛する伏見さんのことだから、きっとその点に気づいていたのだろう。叫び方というより、むしろ「歌い方」といった方がしっくりくる◆この夏、伏見さんらの発案と行政が手を組んだ初の試みであるイベント『たちかわの夏・音楽祭』が開かれる。市内のあちこちが音楽で彩られるという。伏見さんの「歌い方」は、今後もわが街の、ひとつの通奏低音となっていくに違いない。

■お詫びと訂正

先月号の『真味百撰』欄、『プチ・フルール』の紹介記事の中で「週替りのランチは¥800」とあるのは「¥900」の誤りです。プチ・フルール様他関係各位にご迷惑をおかけいたしました。お詫びして訂正させていただきます。

（表紙）油彩「あーハトポッポ」　鈴木美桂子（第14回多摩総合美術展入選作品）
（編集）池田隆男　小林康史　鶴川 理　内藤裕子　名尾居真　山田恵子
（写真）中村 伸　五來孝平

月刊えくてびあん　第168号
平成十年七月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190-0012
電話　〇四二（528）0082
FAX　〇四二（528）0065
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

連載 四字熟語（13）

桑弧蓬矢

「そうこほうし」と読む。男子が四方へ雄飛して、成功しようとする志のたとえ。桑弧は、桑の木でつくった弓。蓬矢は、蓬の茎でつくった矢。

昔、中国で男の子が生まれると六組の桑弧蓬矢を作り、天地四方を射て、将来四方に雄飛するよう、願い祝った故事による。

同意語句に「青雲の志」、「桑蓬の志」がある。

真味百撰⑯

お弁当・お惣菜 おかず屋さん

富士見町2-21-5／0120-26-3421（フリーダイヤル）
AM11：00～PM7：00／日曜定休

お米屋さんがはじめただけに「ご飯」の美味しさには定評有り。15～20種の惣菜も総て手作り。

一人暮らしの若者や忙しいサラリーマンなどにとっては、手軽で安価なお弁当の存在は嬉しい限り。しかし安いからといって、たかが弁当と侮ってはいけない。

富士見町2丁目で米穀店を営む柳井忠さんが、昨年8月に開いた『おかず屋さん』。弁当のみならず、毎日手作りのお惣菜がズラリと並ぶ、文字通りの"おかず屋"さんだ。

が、惣菜屋さんとはいえ、やはり"お米屋さん"が始めた店、ご飯の美味しさに定評がある。中には、わざわざご飯だけを買っていく客もいるとか。米の専門店として選定から仕入れまで、すべてを独自に行えるのがこの店の強み。ちなみに使われているのは新潟産のコシヒカリのみ。冷めても美味しく食べられるのは選びぬかれた「本物」の米である証しだ。

弁当メニューは丼物を含めると約30種。「日替わり弁当」や「豚生姜焼き弁当」（ともに¥500）が人気。暑い季節には辛みの効いた「メンタイ弁当」（¥380）がお薦め。惣菜は揚げ物・煮物など、毎日15～20種類が並ぶ。勿論すべて手作り。

もうすぐ開店1周年。あっという間だったと振り返るのは、店を仕切る奥さまの正代さん（写真）。今後はあくまでも「お米が基本」の姿勢は崩さずに、「若い人からお年寄りまで、幅広く喜んでもらえるおかず作りを目指したい」と語る。

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は柴崎町(B)・曙町(B)のお店です。

私の立川原風景　最終回

小野谷　治（栄町）

◆　昭和記念公園にて　◆

昭和十三年、石川島飛行機（現立飛）に就職した私は立川に住みはじめた。この池のあたりは当時、陸軍航空隊の滑走路周辺の草原だったたと記憶している。見上げる空にはひばりのさえづりがこだまし見渡せば奥多摩の山並みや富士山までがくっきりと見えたものである。

時が立つにつれ飛行場周辺の工場も拡張され、立川の街もにぎやかになっていった。その後長い間米軍の飛行基地であったが、まさかこんなに静かで美しい公園になろうとは、当時の人々は夢にも思わなかったことである。

（画家）